

沖縄で学んだ沖縄

序

2011年の沖縄の旅は私にとって生涯忘れがたい経験であった。沖縄本土の文化のみならず、沖縄戦争、在沖縄米軍基地に関しても多数見学していた。以下の見学報告は、日々深い感動を受けた私が日記に書いた内容をまとめたものである。

首里城—琉球王国の栄華を伝える世界遺産

首里城は、14世紀後半からおよそ500年にわたって琉球王国の政治や文化の中心地であった。琉球王国はここを拠点に、中国や日本、東南アジアとの間で活発に交易し、独自の王朝文化の形成につとめたのである。中国と日本の築城文化を融合した様々な建物は、かつての琉球王国の栄華を誇っている。

特に私の注目を引いたのは、首里城の正門にあたる「守礼門」であった。「守礼門」が中国ならではの「牌坊」と非常に似ていると感じたため、受付の方へこの門の建築の歴史について尋ねた。すると、琉球王国の象徴である「守礼門」は実は正式な門でないということが分かった。琉球王国の永遠の繁栄を祈った上、昔の中国皇帝の「冊封使」（さっぽうし）と呼ばれる派遣使など、訪れる人を出迎えることがこの門の主な役割だったという。中国の皇帝から、琉球の国王であることを承認してもらうことを「冊封」といい、中国との460年以上の貿易歴史のなか、23回も行われたそうである。一方、中国の皇帝への服従の決意を表明するために、琉球の使節団は、二年ごとに北京に進貢していたという。こういう歴史的な原因が背景にあるので、首里城正殿の真紅の壁や石組みなどが、中国古代の建築様式と相似していることは、驚くにもあたらないだろう。

中国との長い間の来往交流の結果、伴奏楽器の三線や銘酒泡盛などは輸入され、沖縄本土の文化として開花していたのである。特に三線は、琉球から安土桃山時代の日本に伝えられ、現在邦楽に欠くべからざる三味線に改良されていたという。空手も、琉球古来の武術であった「手」に、中国から伝わった拳法を取り入れて生み出されたといわれている。

玉陵（たまうどうん）

首里城より徒歩10分ぐらいの所に、「玉陵」という沖縄最大の家形の墓がある。そこには王家一族が眠っているようだ。その陵墓は、そこに葬られる資格を持った王族の名前を記したものである。面白いことに、碑文には、「ここに記された尚真から尚源道までの九人とその子孫は、千年万年にいたるまで玉陵におさめるように。もし、後の世に被葬者をめぐり争いごとがおこったら、この碑文を見よ。その文面にそむく者があれば、天罰をうけるであろう」と書いてあった。先人がそこまで注意深く子孫に忠告したとは、人々を感嘆させずにはおかないだろう。

その碑文を興味深く見つめていたところを、庭を掃除しているおばさんに話しかけられた。「そこにはね、その長男の名前が書いてないですよ。なんらかの政治抗争に巻き込まれて、お父さんの尚真によって追放されたんですよ…」と。なるほど。そういった教訓があったからこそ、碑文には以上のような内容

が書かれたのではないかと私は思った。

旧海軍司令部壕－「夜はみんな、杖を持って歩いた。死体を踏まないためだった」

海軍司令部壕の入口から、105段、30メートルほどの細い階段を降りると、通路が縦横に張りめぐらされた壕内へと続いた。あたりは不気味に静まり返っていた。司令官室や作戦室などの壁には、幕僚や兵士たちが手榴弾で自決した時の破片のあとが当時のままくっきりと残っている。沖縄に上陸した米軍は、1945年6月11日の夕方に戦闘を一時的にやめ、第32軍の司令官たちに無条件降伏するよう勧めたが、完全に無視されたのである。6月19日、追い詰められた大田司令官は、「最後まで戦うように」との最後の軍命をだして、その後自決したのだ。この行動を取った彼らは、軍人としては大儀に殉じたといえども、戦争終結を遅らせたのみならず、いたずらに無数の兵士や沖縄の住民を犠牲にしてしまい、到底許せないと言わざるを得ないだろう。

沖縄に行く前に、「悲惨極まりない沖縄戦や原爆投下は本当に免れられなかったのか」という疑問を常に抱いていた。その答えは、旧海軍司令部壕記念館で見つかった。1945年2月、天皇は悪化する戦局に不安を感じ、首相や大臣などを呼び寄せて意見を求めたということである。東条英機内閣に反対した近衛文麿は「敗戦は必至である」と報告し、戦争の早期終結を訴えた。しかし、他の意見は「台湾で敵に大きなダメージを与えることができる」という軍部の意見を支持するものであった。結局、天皇も「それからあと、外交手段にうたててもいいと思う」として、近衛文麿の上奏文を棚上げにしてしまったという。つまり、その時点で、日本の首脳部が戦争終結を決定していれば、沖縄戦や原爆投下の惨劇は起こらなかったはずだ。その後、この話題について、沖縄生まれ育ちのタクシーの運転手さんへ尋ねると、彼も同感であり、沖縄戦を避けることができたはずだと語った。彼の話によると、「米国との講和以外に途は無い」とする近衛上奏文が天皇に出されていたが、天皇は自分の地位がどうなるのか分からなかったせいか、降伏に踏み切れなかったのだという。その上、「一億玉砕」という当時の軍部の思想・政策も主犯であった。そのような根本的な軍事思想が背景にあったため、それを抑えることができなかった天皇への求心力や指導力がほとんど黙殺されていたことも当然なことだ、と。

ひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館

沖縄を訪問する前に、沖縄戦を深く理解するために、柴田昌平が監督した「ひめゆり」というドキュメンタリーを見た。その後、あの戦場の惨状は私の脳裏を離れなかった。それゆえ、複雑な心境にひたりながら、ひめゆりの塔の前に辿りついたのだ。

「ひめゆり」の由来

現地を訪ねるまで、「ひめゆり」が植物の花のことであり、純潔な心を象徴した名称だと思っていた。しかし、ひめゆり平和祈念資料館で、「姫百合」は学徒隊員の母校、沖縄県立第一高等女学校の校誌名「乙姫」と沖縄師範学校女子部の校誌名「白百合」を合わせた名前だったということを知った。

展示館の中で、「姫百合」の生存者の石川幸子の姿があった。石川さんは、ごく普通の一人の日本人老人にしか見えなかったが、実際、誰よりも沖縄戦の

恐ろしさを知っていた。来客に包囲された石川さんは、涙ながらに65年前のことを一々昨日起こったことのごとく語っていた。ひめゆり平和祈念資料館米軍の沖縄上陸作戦が始まった1945年3月23日深夜、「姫百合」の女生徒たち222人、教師18人は、強制的に動員され、南風原の沖縄陸軍病院に看護員として配置された。私よりも5年も年下の彼女たちは、飲まず食わず眠らず、負傷兵の看護や水汲み、死体埋葬などに追われていた。ところが、6月18日に、学徒たちは突然の「解散命令」を受け、絶望し、米軍が包囲する戦場を逃げ惑い、ある人は砲弾で、ある人はガス弾で、そしてある人は自らの手榴弾で命を落としたという。

私は「当時、米軍や日本軍のことを恨んでいたのでしょうか」と質問したところ、石川さんはこう答えてくださった。「いいえ、恨むよゆうなんかはなかったですよ。私たちは頭が単純で、戦争について何の疑念も抱かず、むしろ積極的に戦場に向かったのです。そういう恐ろしい教育を受けたのですよ。」

そして、週三回ひめゆり平和祈念資料館に通い、沖縄戦争の経過を解説する石川さんに、私はもう一つの質問を出した。「毎日のように、来館者の前に立ちながら、同じ記憶、しかもトラウマとは言える記憶を語るのは、どうしてでしょうか。いつか飽きてしまわないのでしょうか」。すると、石川さんは「いいえ、できれば一生続けたいと思います」と断言した。「二十一世紀にあって、戦争を知らない世代が世界人口の過半数を超えて、未だ紛争の絶えない国内・国際情勢を思うたびに、私と他の生存者たちは自ら体験した戦争の恐ろしさを語り継いでいく必要があると痛感せざるをえません…」と。

ひめゆり平和祈念資料館を出、沖縄陸軍病院南風原壕群第20号までの道中、もう一人の沖縄生まれ育ちのタクシーの運転手さんと沖縄戦争について討論していた。そして彼は、私を驚愕させずにはおこななかったことを語っていた。

「当時はね、日本軍は米軍よりも悪かったのよ。日本軍は、沖縄の住民を戦闘に巻き込み死なせても、何とも思わなかったですよ…さっき『ひめゆり』でも見たでしょう。何も知らない女の子たちを強制的に働かせて、失敗しそうになったら突然『解散しろ』って言って、何千人も死なせたんですよ…それでね、私の祖父も殺されたんです。アメリカ軍じゃなく、日本軍に。その時、沖縄方言で話すことが許されなかったそうです。だから、日本語のできない祖父はスパイ嫌疑で、任意に殺されたのよ。それだけじゃなくて、食料の強奪も毎日のように氾濫していた…女の子も、日本軍に見られたら、もう最後…。以上のことを言い終わって、憤慨した運転手さんは、長い間なにも言わなかった。私も、死のような沈黙を破らず、深い思いに沈んでいた。確かに、旧海軍司令部壕においても、「米軍に保護される母と子」などと名づけられた写真は何枚かあったのだ…

沖縄陸軍病院南風原壕群第20号

沖縄陸軍病院南風原壕群第20号は、ひめゆり学徒222人が教師18人に引率され、看護婦として働かせられた現場であった。第20号は長さ約70メートルの人工の横穴壕であり、高さは約1.8メートルである。壕に入るときに、私は15人ぐらいの修学旅行中の中学生と同じ参観グループに入れてもらった。皆は黄色い安全帽を被り、サイズの大きい懐中電灯を持って、足元に

用心深く壕の洞窟に入った。入口のドアが閉まるが早いか、洞窟内は真っ暗闇になってしまった。懐中電灯を点けても、身の回りの一角しか見えなかった。地中に多数の医薬品類が隠すように埋められ、負傷者のものと思われる石鹸箱、筆箱、発掘された人骨なども見えてきた。米軍の戦闘機に攻撃されないために、看護婦も兵士たちも、できるだけ外に出ず、四六時中ほとんどこのような暗闇で生活していたといわれている。解説員の話によると、当時撤退や軍事移動など命令が下されるたびに、重症患者たちは青酸カリが配られ、自決させられたそうである。臨死の際、「日本万歳」「天皇万歳」を叫んだ兵士は一人もいなく、殆どの人は自分の母親や妻の名前を繰り返しながら死んでいったという。

米軍基地と沖縄住民の意識 アンケート

戦後、沖縄の米軍基地は、県民の意思を問うことなく「日米安全保障条約」によってひきつづき使用されることになった。沖縄は全国から見ると、面積が0.6%、人口が1%の小さな県である。しかし、その沖縄に現在全国の米軍専用施設の約75%が集中しているのである。それは県面積の約10%にあたり、沖縄島にかぎると約19%にもおよぶ。全国民生活が異常な状態におかれているとも言えるのだろう。しかも、基地は陸上だけでなく、空や海にも訓練域として広がっているのである。そのため、復帰36年以上たった今なお基地からの航空機騒音、環境破壊、米軍兵士による犯罪はたえず、県民に多大な被害を及ぼしているのである。

そういったことを背景に、私は沖縄に滞在した六日間、20歳～63歳の13人の沖縄住民を対象に、在沖縄米国駐留軍についてアンケートを実施した。

「米軍基地の存在によって戦争への不安を感じることはありませんか」という質問に対し、11人は「あります」と回答。しかし、「国外に移すべきだと思いませんか」という質問を巡っては、7人だけは「国外に移すべきだ」と答え、残りの6人は「知らない」または「移さないほうがいい」と考えた。その相違の原因は「米軍基地について具体的にどう思いますか」という質問の答えに反映されていると考え得るだろう。答えの中、基地の騒音（特に飛行機、ジェット、ヘリコプター）による被害（例えば、騒音で授業が中断になることがよく起こると言われている）に言及した人は8人であり、最も問題視されていた。その上、6人が米軍基地に対して矛盾した感情を持っていたということが分かった。その理由として、要するに米軍基地自身は嫌で移設してほしいが、一方、米軍基地の存在による生まれた仕事（サービス業、旅行業）など経済的な連帯効果は不可欠だと考えられている。沖縄においては米軍基地に就職するための専門学校さえあるそうだ。ある三人は、沖縄が日本の侵すべからざる領域であるとし、米軍基地の無条件の移設も当然のことだという意見を持った。それに対して、他の二人は米軍基地の存在によって日本の安全が保障されていると考え、近い将来に移設させないほうがよいという。

以上の回答をまとめてみると、沖縄住民の米軍基地に対する「二律背反」という意識がうかがえる。つまり、米軍基地の滞在は何とんでも嫌いであるものの、現在の沖縄は、安全上も経済上も米軍に依存せざるをえないというのが現実である。